

名無しの神々 *Nameless Gods*

—秘儀、神話、儀礼とギリシアポリスの宗教 *Mystery Cults, Myth, Ritual and Greek Polis Religion*—

ヒュー・ボーデン (キングス・コレッジ・ロンドン)

訳：佐藤 昇

はじめに

名無しの神々

サモトラケ

カペイロイ

ペロポネソスの祭祀

名無しの神々とポリスの宗教

〔解題〕本原稿は、ヒュー・ボーデン Hugh Bowden 氏による口頭報告（英語）の全訳である。報告は、2009 年 3 月に東京大学で行われた国際学会「第 2 回古代地中海世界コロキウム」（主催：C. Morgan BSA 館長、桜井万里子東京大学教授（当時））において発表された。ボーデン氏は、オックスフォード Oxford 大学で博士号を得た後、現在までロンドン大学キングスカレッジ古典学部 Department of Classics, King's College London で教鞭をとっている。古代ギリシア宗教史を主なフィールドとし、著書に『古典期アテナイとデルフォイの神託：予言／占いと民主政』*Classical Athens and the Delphic Oracle: Divination and Democracy*, 2005, Cambridge、『古代世界における秘儀』*Mystery Cults in the Ancient World*, 2010, London がある。以下に訳出した報告は、2 つ目の単著を発表する直前に行われたものであり、著書の一部を成すものでもある。ここで扱われている「秘儀」は、古代ギリシア世界の至る所で確認される祭祀形態の一つであり、近年、ギリシア宗教研究者から特に大きな注目を集めている。我が国でも、桜井万里子氏などがエレウシスの秘儀やオルフェウスの祭祀に関する論文を発表している。訳者は昨年『クリオ』第 25 号誌上で、ギリシア宗教儀礼の概要を成す「供犠」について翻訳する機会を得たが（ロバート・C・T・パーカー「古代ギリシアの供犠：大問題」）、こちらは犠牲獣の分配や行列行進などを伴い、ある種、公開スペクタクルのような側面を有している。このような公開儀礼と、秘儀、すなわち口外してはならない宗教儀礼とはどのような関係にあるのだろうか。また、史料の中で既に情報が錯綜している「秘儀」について、我々はこれをどのように扱えばよいのだろうか。ボーデン氏の論を手が

かりに、ギリシア宗教の広がりや史料の有様について考えてみたい。なお、本文中[]で括っている箇所は訳者による補いである。

はじめに

名無しの神々。本報告では、彼らに捧げられた祭祀について検討を加える。これらは、ギリシア宗教研究において十分に検討の対象とされてこなかったように思われる。古代ギリシアの神々の中には、古代の時点で、何者なのか、アイデンティティが明確に確定されず、ある種の説明的な言葉で呼ばれていたものもあった[訳注:「ゼウス」「アポロン」といった固有名詞ではなく、「偉大なる神々」「娘」のような説明的表現、普通名詞で呼ばれているものがあった]。もちろん、そうした神々にもさまざまな祭祀が捧げられ、中にはきわめて重要なものもあった。こうした現象をいかに理解するかは、ギリシア宗教全般を捉えるに際にも大きな意味を持っている。というのも、現代の研究者はえてして、神話と儀礼の関係に焦点を合わせようとしがちである。神話と儀礼が、ギリシア宗教の重要な側面を表現するのに用いられていたと想定し、古代ギリシア人がそれらをどのように利用していたのか、この点に関心を寄せているのである。しかしながら、名無しの神々、明確なアイデンティティを持たない神々については、これらにまつわる神話が語られることはなかった。神話が存在しない以上、そうした神々に対する儀礼は、古代でも説明が容易ではなかったのである。

現代の研究者はこの問題を矮小化する傾向にあり、それを正当化するのに古代の著作家を持ち出してくる。たしかに古代の著作家は、名無しの神々が本当は何者なのか、同定を試みてはいる。しかし実際のところ、それは明らかに何かしら必要性にかられてやっているに過ぎず、その同定も、以下で確認するように、必ずしも説得的ではない。にもかかわらず、現代の研究者たちは、そうした史料を利用して、「名無しの神々とは言っても、本当のところ名前を持っているものもいるのだ。ただそれは秘密にされていた。彼らにまつわる神話だって、実際にはあるのだが、多くの人の知るところとはならなかったのだ」と主張している。しかし、この現象全体を見渡してみると、この説明は必ずしも最善とは言えないように思われる。

名無しの神々

まずは、本報告で、何をもって「名無しの神々」と称するのか、この点を明らかにしておきたい。これには、いくつかのカテゴリの神格が含まれる。

まずは「偉大なる神々 Great Gods (*Megaloi Theoi*)」である。このうち、史料上もっとも多く確認できるのが、エーゲ海北部のサモトラケ島で信仰されている「偉大なる神々」であるが¹、メガロポリス（ペロポネソス半島南西部アルカディア地方）²、およびアンダニア（ペロポネソス半島南西部メッセニア地方）³の「偉大なる神々」に関しても碑文史料が残されている。「偉大なる女神たち」についても史料が残されているが、こちらは状況がよりいっそう錯綜している。たとえば、ローマ帝政期の作家パウサニ阿斯は「偉大なる女神たち」という言葉を用いてはいるが、そこで想定されているのは、アッティカ半島のエレウシスで祭祀が執り行われている、デメテルとコレという名前の知られた女神である。しかし碑文史料をみる限り、パウサニアスの用法は必ずしも正しいとは言えないようだ（後述）⁴。にもかかわらず、現代の研究者は、「偉大なる神々」あるいは「偉大なる女神たち」について解釈する際、パウサニ阿斯から甚大な影響を受けてしまっている。

第二に、集団としての名前はあるものの、個別には明確なアイデンティティを持たない神々もいる。この中で最も重要なのは「カペイロイ」であるが、他にも「クレテス」や「コリュバンテス」といった神々の集団がいる。こうした集団名は、神々のアイデンティティを解明するのに、ほとんど何の手がかりにもならない。実際「カペイロイ」あるいは「コリュバンテス」といった言葉については、それがそもそもどういった意味を持っていたのか、その起源についても研究者の間で意見の一致を見ていない。

第三に、名前はついているものの、単なる称号、あるいは説明的な呼称に過ぎない神々がいる。たとえば、「デスポイナ（女主人の意）」、「ソテリア（救い主（女性形）

¹ Cole 1984.

² *Inscriptiones Graecae* 5.2.466（前1世紀より前には遡らない）。

³ *Inscriptiones Graecae* 5.1.1390.

⁴ パウサニ阿斯『ギリシア案内記』4巻1章5～8節、4巻2章6節、4巻14章1節、4巻15章7節（アンダニアとエレウシスの密接な結びつき）、8巻31章1節、7節（メガロポリスにおけるエレウシスに基づく祭祀）；バトス／トラペズースの「偉大なる女神たち」についてはパウサニ阿斯『ギリシア案内記』8巻29章1節。なお、ペロポネソス半島ラコニア地方のギュテオンから出土した、ごく断片的な碑文には「偉大なる女神たち、デスポイナたちへ」という文言が見えるが、そのほとんどが補いによるものである（*Inscriptiones Graecae* 5.1.1151）。

の意)」、「メテル(母の意)」などがそれに当たる。完全を期すために、「コレ(娘の意)」も付け加えるべきだろう。

さてすぐに気づくことだが、これまでに言及した神格のほとんどすべてが、一般に「秘儀 Mystery Cult」と呼ばれる祭祀に関わっている⁵。秘儀研究が中心的に扱うのは、大抵、関連する神格に固有の名前があるケースに限られ、それらには重要な神話が残されている⁶。筆頭にあげられるのは、デメテルとコレに捧げられたエレウシスの秘儀と、これに深く関わるペルセフォネ略奪の神話であろう〔訳注：エレウシスで行われていた秘儀は女神デメテルとその娘ペルセフォネに捧げられていた。ペルセフォネはハデス神に連れ去られたという神話が残されている〕⁷。これに続くのは、ディオニュソス関連の祭祀だろうか。ディオニュソス祭祀に関しては、前 5 世紀の詩人エウリピデスが制作した悲劇『バツカイ』と、ティタン族によるディオニュソス殺害の神話が、研究者たちの強い関心を集めてきた〔訳注：神話によれば、ティタン族は、ゼウスの妻ヘラの差し金により、ゼウスとペルセフォネの間に産まれたディオニュソスを八つ裂きにした。ゼウスはティタン族を雷で灰にする一方、ディオニュソスを再生させたという〕⁸。次に来るのはイシスだろうか。彼女をめぐる神話は、夫であり兄弟であるオシリス、メテル(母。この女神はしばしば「キュベレ」と呼ばれ、神話の中で「アッティス」と深い関わりを持つ)⁹、そしてミトラス(この神格に関連する文学テキストはないものの、一貫して一定の図像によって表象されている)と関わりがあったことを物語っている〔訳注：イシスは古代エジプトの主要な女神だが、その祭祀はギリシア・ローマ世界にも広く流布した。神話によれば、イシスは、小アジア内陸のフリュギア地方でメテル(母)として祀られたという。また、彼女の神官にミトラスという名の者がいたとも伝えられている。メテル、または「神々の母」と呼ばれる神格は、フリュギア地方から広まったとされる女神キュベレと同一視されることが多い。キュベレ神話に登場するアッティスに対しても、各地で祭祀が行われていた。ミトラスを祀る祭祀は紀元後 1 世紀頃からローマ帝国で広まった。各地で牛を屠殺するミトラスの図像などが発掘されている〕。これらに関しては、いずれの場合も神話が秘儀を解釈するための鍵とされている。しか

⁵ Bowden 2010: 49-91.

⁶ E.g. Burkert 1987 はエレウシス(デメテル)、ディオニュソス、メテル(これだけが唯一「名無し」の神)の例である)、イシス、ミトラスに、明確に焦点を合わせている。

⁷ E.g. Clinton 1993.

⁸ E.g. Seaford 1981.

⁹ E.g. Vermaseren 1977.

しながら、神話が存在しない場合には、そういうわけにもいかないのである。

サモトラケ

それでは次に、「名無しの神々」について、古代には、どのようなことが知られていたのか、どのように理解されていたのか、この点をできる限り明確にしておく必要がある。まずヘレニズム時代に書かれた叙事詩『アルゴナウティカ』を解説する古代の注釈者は、サモトラケの「偉大なる神々」に対して、完璧なアイデンティティを付与しているように思われる。

ムナセアスの言によれば、サモトラケでは「カペイロイ」に対する秘儀が行われている。数にして4柱いる、かの神々の名前は、アクシエロス、アクシオケルサ、アクシオケルソス、<カスミロス>である。アクシエロスはデメテルであり、アクシケルサはペルセフォネ、アクシオケルソスはハデスである。4番目に加えられたカスミロスは、ディオニュソドロスによれば、ヘルメスである。カペイロイという呼称は、この神々がもともと居た、フリュギアのカペイラ山に由来するものと思われる。また、カペイロイというのは2柱で、年長の方がゼウス、年若の方がディオニュソスだと主張する者もいる¹⁰。

個々の名称については後で見ることにして、まずはサモトラケにおいて執り行われていた祭祀が、カペイロイに対するものであったというという主張から見ていこう。これは前5世紀の歴史家ヘロドトスも主張するところである。その記述からすると、この歴史家もサモトラケの秘儀に入信していたような印象を受ける¹¹。しかし古代の著作家の間でも、このことについて、それほど明快な意見が呈示されている訳ではない。例えば、後1世紀頃に書かれたストラボンの『地理書』には、次のように記されている。

多くの者が、サモトラケで信仰されている神々をカペイロイと同定している。とはい

¹⁰ ロドスのアポロニオス第1歌917行に対する古注。

¹¹ ヘロドトス『歴史』2巻51章。プルタルコス『マルケルス伝』30章6節でも同様の同定をしている。

え、カペイロイが何者なのかということについては、彼らとて言うことができないのだけれど。彼らは、キュルバンテスやコリュバンテス、クレテスやイダイオイ・ダクテュロイの場合と同じようなことをしているのだ¹²。

さらに重要な点は、碑文史料がこの主張を支持していないということである。サモトラケの碑文では、神々が、テオイ（神々）、テオイ・メガロイ（偉大なる神々）、テオイ・ホイ・エン・サモトライケイ（サモトラケにおわします神々）、それからテオイ・サモトライクス（サモトラケの神々）と呼ばれており、こうした呼び名は全て、同島以外から出土した碑文でも確認されている。これに対して、カペイロイに捧げられた碑文となると、サモトラケ島ではこれまで一つも出土していない¹³。それでは、どうしてヘロドトスはこのような同定をしたのだろうか。

一般に、サモトラケでも、その他の場所でも、祭祀の意味は「聖なる物語（ヒエロイ・ロゴイ）」を通じて入信者たちに明かされていたと考えられている。ヘロドトス自身が次のように述べている。

アテナイ人は、ギリシア人として初めて勃起した陽根（ファロス）を持つヘルメス像を造った。この慣習を彼らはペラスゴイ人から学んだ。これに関してペラスゴイ人は、とある聖なる話（ἱπὸν τινα λόγον）をしたのだが、それはサモトラケの秘儀で明かされている（δεδήλωται）¹⁴。

「明らかにされている δεδήλωται」という動詞からすると、この物語は、語られていたのではなく、演じられていた可能性も考えられる。「聖なる物語」がパフォーマンスだったとすると、これが祭祀の意味を伝達するための手段だったのかどうか、明確ではない。またストラボンが注記しているところによれば、古代の注釈者スケプシスのデメトリオスは、サモトラケのカペイロイについて「秘儀の物語（ミュスティコス・ロゴス）」がなかったと述べている¹⁵。実際、サモトラケでの入信儀礼は、訳が分からない

¹² ストラボン『地理書』7巻断片50番(331c)

¹³ Cole 1984.

¹⁴ ヘロドトス『歴史』2巻51章。

¹⁵ スケプシスのデメトリオスの記述は、ストラボン『地理書』10巻3章20節に引用されている。

ような状態にされたままだったのかもしれない。そう考えるだけの根拠も十分にある。前1世紀の歴史家シチリアのディオドロスは、次のように記している。「[サモトラケの]原住民は独自の古代語を使っていたが、そこで用いられていた単語は、今日でも彼らの犠牲式の中に数多く残されている¹⁶」と。この聖域で行われていたギリシアの祭祀は、考古史料に基づく限り、前7世紀初めにまで遡ることができ、これは、確認できる限り、サモトラケ島に初めてギリシア人が居住した時期におよそ一致する。したがって、祭祀においてギリシア人入植以前の言葉や儀礼が用いられていたというのも、十分にありそうなことである。

サモトラケの「偉大なる神々」をカペイロイと同定することには、疑念を差し挟まねばならないようだ。そうすると、ここで重要な点が浮かび上がってくる。ヘロドトスは、どうやらサモトラケの祭祀に入信していたようだが、しかしそれでもなお「偉大なる神々」がカペイロイだと信じていられたのである。そうすると、おそらく秘儀で祀られている神々の正体は、儀式の最中にも、儀式の後にも、入信者にすら明かされなかったということになるだろう。おそらく、そもそも「偉大なる神々」のアイデンティティを知る者などいなかったのかもしれない。これが一番シンプルな解釈であろう。入信の儀式をはじめ、諸々の儀式を司る神官たちですら、儀式で理解不能な言葉を用いたりしているわけで、自分たちが祀っている神々について何も言うことができなかったのである。

カペイロイ

しかしそもそもカペイロイとは、一体何者だったのだろうか。ストラボンが記しているように、この問いには、古代の著作家たちの誰もが納得するような、唯一絶対の正解などあり得ない。レムノス及びインブロスというエーゲ海北東の2つの島、そしてボイオティア地方のテバイ近郊には、カペイロイを祀った神域があった。伝統的に、「カペイロイ」という名前は、セム語「カビル kabir」に由来すると説明されている。その意味するところは「主君 lord」といったところで、「偉大なる神々」とさして変わらない。しかし、セム系の名前がいかにしてこの祭祀と結びつけられるようになったのか、全くもって不明である。あるいは別の説明として、カペイロイというのが、「ギリシア以前

¹⁶ デイオドロス『歴史叢書』5巻47章3節。

の」インド・ヨーロッパ語族のものだという説がある¹⁷。この場合、意味は依然として不明ながら、アナトリア起源ということになるようだ。

ストラボン、明らかにインブロス島やレムノス島、それにトロアス地方の祭祀に言及して、カペイロイをめぐる、さまざまな物語を語っている。これらはおよそ、カペイロイが3人組であること、あるいはことによると、3人組が2組あったかもしれないということを示している。ストラボンはそこで次のような表現を加えている。τὰ δ' ὀνόματα αὐτῶν ἐστὶ μυστικά. これは、「彼らの名前は秘儀の秘密だ」という意味なのかもしれない¹⁸。他方、パウサニアスは、ボイオティア地方のカペイリオン〔カペイロイの神域〕に2柱のカペイロイがいたと記している¹⁹。実際、この記述を指示するような陶器画表現がその遺構から発見されている。ある陶器の断片には、おそらく、カペイロスとパイス（「子供」の意）に同定されている2柱の神の像が描かれている。こうした名前は、彼らは何者だったのか、ギリシア人があまり理解していなかったということを強調している。さらにパウサニアスは、些か込み入っているが、次のような話もしている。まずカペイロイは何者なのかは口にするまいと述べ、それでいて後になって、彼らがプロメテウスとアイトナイオスなる名前の父子であり、不死なる存在ではないと話している〔訳注：「不死なる」者というのは神々のことを指す〕²⁰。ティタン族のプロメテウス〔訳注：人間に火を授けたとされる神〕が火山島レムノスから火を盗んでいることから、前出の名前はこの島との結びつきがあるようで、そうするとボイオティアのカペイリオンとエーゲ海東北部のカペイロイ信仰との間にも仄かな繋がりが浮かび上がる。レムノス島での祭祀は前6世紀には始められたようだが、これに対してボイオティアの聖域では、同世紀の後半から奉納遺物が確認されはじめ、最初期の建築物はようやく前500年頃のものである²¹。以上の諸点に、カペイロイという名前がアナトリア起源であるということとをあわせて考えれば、およそ以下のような筋書きが想定できるだろう。すなわちカペイロイ信仰は、そもそもアナトリアからエーゲ海東北部に、おそらく前6世紀の初めに伝播し、そこから同世紀の間にボイオティアにもたらされたのである。しかし、一体何

¹⁷ Beekes 2004.

¹⁸ ストラボン『地理書』10巻3章21節。

¹⁹ パウサニアス『ギリシア案内記』9巻25章6節。

²⁰ パウサニアス『ギリシア案内記』9巻25章5-6節。

²¹ レムノス：Beschi 2000; Beschi, Monaco, Zarkadas & Gorini 2006. ボイオティア：Schachter 2003; Heyder & Mallwitz 1978; Cooper & Morris 1990: 66-8.

がもたらされたというのだろうか。ボイオティアのカペイリオンで発見された什器には、別の文脈で発掘されていれば、ディオニュソス的な図像と理解されるようなものも描かれている。人物像は詰め物で膨らんだ喜劇の衣装をまとっている。背景には葡萄の房が描かれ、カペイロスと見られる神の姿はディオニュソスと瓜二つだ〔訳注：ディオニュソスは劇の神であり、酒（葡萄酒）の神でもある〕。こうした点から考えると、この祭祀がボイオティアに伝播した際、図像らしき図像はほとんど、ことによると一切伝わってこなかったのかもしれない。それにまた、レムノスのカペイロイ3兄弟がボイオティアでは親子ペアになっていたのだとすると、祭祀が誰に捧げられるものだったのか、正確な情報が伝わっていなかった可能性も考えられる。レムノスとボイオティアの両方で共有されていたのは、他ならぬ入信の儀式だけだったように思われる。

ここでもう一つ、カペイロイを描いた別の図像について述べねばならない。キュクラデス諸島の一つシュロス島から出土した、ある貨幣には、2人の若者の姿が刻まれており、それぞれの額の上には星が描かれている²²。この若者像はカペイロイとされているが、その図像は明らかにディオスクロイの表象と関係がある〔訳注：ディオスクロイは、カストルとポリュデウケス（ラテン形：ポルックス）という双子の神。スパルタをはじめ、ギリシア・ローマ世界の各地で信仰されていた〕。そしてディオスクロイは、サモトラケの「偉大なる神々」と同じように、航海者たちの守護神格である²³。また、デロス島にはサモトラケイオンとして知られる神域がある。これも初めはカペイリオンとされていた²⁴。その神官には、碑文史料によれば、幾通りかの称号が用いられており、最も長く完全なものは「テオーン・メガローン・サモトラコーン・ディオスクローン・カペイローン（サモトラケの偉大なる神々、ディオスクロイ、カペイロイの〔神官〕）」とされている。これは、私の考えでは、デロス島民がこれらの3グループを同一のものと考えていたことを示すのではない。むしろここは、「サモトラケの偉大なる神々であれ、ディオスクロイであれ、カペイロイであれ、なんであれこの神域におわします神々」と理解すべきではあるまいか。言い換えれば、この役職名は、問題の神格のアイデンティティがよく分からないということを表明しているのである²⁵。カペイロイを描き出す際、ディオス

²² *Lexicon Iconographicum Mythologiae Classicae* 8.2: 560.

²³ ディオドロス『歴史叢書』5巻47～49章。

²⁴ Bruneau 1970.

²⁵ こうした形式の呼びかけはギリシアの讃歌に見られる。アプレイウス『変身物語（黄金のロバ）』11巻47章に見られる事例は、秘儀に関わるものである。

クロイや、ディオニュソスの表象を利用するのは、固有の図像表現を持たない神々に、意味ありげな格好をさせようという試みなのだろう²⁶。



ボイオティアのカベイリオン出土の土器



シュロス島出土の貨幣

ペロポネソスの祭祀

ペロポネソスの祭祀に目を向ければ、またアイデンティティの不確かな神格の様子が浮かび上がってくる。最も明確なのは、アンダニアで執り行われていた秘儀の事例である。この祭祀に関する最初期の史料は、紀元前 91 年の長大な碑文である。これには秘儀の様々な側面に関して細々とした指示が記されており、神格を指す言葉として「秘儀が捧げられる神々（2～3 行目, cf. 29 行目）[男性複数形]」と「偉大なる神々（34 行目）[男性複数形]」という表現が見られる。どうやらこの祭祀は、地元の篤志家ムナシストラトスによって復興されたもののようである。あるいは、ことによると彼が考案したものだったかもしれない。ムナシストラトスは、祝祭のために書物と容器を無償で提供している。容器というのはおそらく、儀式の中で聖なるものを入れるのに用いられたのだろう。書物には儀礼を執り行うための指示が書かれていたのかもしれない²⁷。碑文に刻まれているのは、明らかに地元の祝祭に関するものだが、およそ 250 年後、パウサニアスの時代までには極めて重要な祝祭になっていたようだ。パウサニアスは、アンダニ

²⁶ パウサニアス『ギリシア案内記』8 巻 21 章 4 節（「クレイトル人のところにはディオスクロイの神域もあるが、これは偉大なる神々と呼ばれている Κλειτορίοις δὲ καὶ Διοσκοῦρων, καλουμένων δὲ θεῶν Μεγάλων ἐστὶν ἱερὸν。」）も参照のこと。：.

²⁷ Guarducci 1934; Georgountzos 1979; Meyer 1987; Zunino 1997: 301-34; Deshours 2006.

アの秘儀創設を神話時代のメッセニア創造と結びつけ²⁸、さらに前4世紀のエパメイノンダスによるメッセネ再建とも結びつけている〔訳注：アンダニア及びメッセネは、ともにメッセニア地方に属するポリス。同地方は前4世紀までスパルタに従属していたが、ボイオティア地方の大国テバイを率いるエパメイノンダスが、レウクトラの戦いでスパルタを破った後に独立させ、新都市メッセネを建設させた〕²⁹。しかしこれらはいずれも、祝祭あるいは秘儀を創設した際の事情を説明しているようには思われない。パウサニ阿斯は自らこの秘儀に入信し、これを、エレウシスの秘儀に次いで2番目に権威があるものとしている³⁰。しかしまたパウサニ阿斯は、アンダニアの祭祀が「偉大なる女神たち」に捧げられたものと思っていて、しかもこれがデメテルとコレを祀る秘儀だと信じている。カペイロイの祭祀に入信したつもりになってサモトラケを後にしたヘロドトスと同じである。さて、たしかに碑文に刻まれた祝祭では、女神デメテルとハグナと呼ばれる神格に対して供儀が行われることになっていて、後者は秘儀が執り行われる神苑の泉と関係がある（85行目）〔訳注：パウサニ阿斯はアンダニアの秘儀が「カルネイオスの神苑」で行われると記述している（『ギリシア案内記』4巻33章4節）〕。しかしながら、ここからパウサニ阿斯の解釈を受け入れるわけにはいかない〔訳注：ハグナ＝ペルセフォネと解釈すれば、パウサニ阿斯の解釈が成り立つようにも見えるが、筆者はこれを否定している〕。これについては、次の点を注記しておこう。実はパウサニ阿斯は、他の箇所でも、次のような間違いを犯しているのだ。アルカディア地方のメガロポリスにある「偉大なる女神たち」の神域を解説するにあたり、パウサニ阿斯はこれを「デメテルとコレの神域」だとしている³¹。しかしこれは誤りである。というのも、メガロポリスからは「偉大なる神々〔男性複数形〕」に言及している碑文ならば出土しているが³²、「偉大なる女神たち」に言及していることが明確な碑文は1つも発見されていないのだ。パウサニ阿斯の描写によると、神域内には相当数に上る男神像、女神像が設置されており、むろんいくつかの神殿もあって、先に述べた著作家自身の同定を必ずしも支持していない。以上の例からも分かるように、注

²⁸ パウサニ阿斯『ギリシア案内記』4巻1章5節。

²⁹ パウサニ阿斯『ギリシア案内記』4巻26章6～8節、4巻33章4～6節。

³⁰ パウサニ阿斯『ギリシア案内記』4巻33章5節。

³¹ パウサニ阿斯『ギリシア案内記』8巻21章7～9節。Jost 1994 参照。

³² *Inscriptiones Graecae* 5.2.466. *Inscriptiones Graecae* 5.2.517(リュコスラ出土)には「偉大なる神々」の複数属格形(男女が区別できない)の他に(3、9、18行目)、「神々に関する祭祀のために τῇ περὶ τοὺς θεοὺς θρησκείᾳ」という句(神々が男性複数で表現されている)も刻まれている(10行目)。

意しておきたいのは、パウサニ阿斯は、祭祀について記述する際、現地の人々から情報を得ようとせず、むしろ自分自身の解釈を押しつけることが十分にできたのである³³

もう一例、名無しの女神について考察を加えたい。アルカディア地方南部のリュコストラには、アルテミス・ヘゲモネとデスポイナ（女主人）の祭祀に結びつけられた、大きな神域がある。建築物は前4世紀のものだが、祭祀そのものについては、それ以前にすでに開始されていたかどうか、判然としない。動物の頭をもった男女のテラコッタ小像が、メガロン（おそらくこの聖域で行われる祭祀活動の中心に相当する場所）で複数発見されている。祭祀関連の像も断片的に残っており、それによるとデスポイナのヴェールは、踊ったり、楽器を演奏したりしている、動物の頭をもった人物像で飾られている。おそらくこれは動物の仮面をつけた人間を描写したものであり、踊りはデスポイナを祀る秘儀の一部（ただし必ずしも秘密ではない部分）だと考えられる。

パウサニ阿斯は、デスポイナがデメテルとポセイドンの娘だと、2度に渡って説明しており、いずれの場合にも、彼女の名前が入信者以外には明かされてはならなかったと付記している³⁴。とはいえ、パウサニ阿斯自身がその名を知っていると主張しているかどうか、定かではない。また、そもそもどのような入信者がその名を知っているのか、それもよく分からない。もっと言えば、実際のところ、「デスポイナ」には名前がなかったのではないだろうか。あるいは少なくとも、儀礼を通じて入信者に限定して明かされるような、秘密の名前などそもそもなかったのではないだろうか。そう疑うだけの根拠は十分にある。パウサニ阿斯はデスポイナの真の名前を、彼女の異父姉妹の場合と比較して、次のように記している。

「女主人（デスポイナ）」というのは、多くの人々の間で用いられている、彼女のエピクレシス（呼び名）である。ちょうどデメテルとゼウスの娘をコレ（娘）と呼んでいるのと同じである。しかし、「娘」の方については、本当の名前がペルセフォネだということを、ホメロスも、さらにその前にはパンフォスも述べているのだが、しかし「女主人」の真の名を非入信者のために書き記すなど、私には恐ろしく

³³ Bowden 2007.

³⁴ 「デメテルは、ポセイドンから娘を産んだと言われている。彼らはその娘の名を、秘儀に入信していない者たちに対して言わないことになっている（パウサニ阿斯『ギリシア案内記』8巻25章7節）。」また8巻37章9節（本文引用箇所）も参照。

思われる³⁵。

ここでパンフォスの詩として言及されているのは『ホメロス風デメテル賛歌』に相違ない。そこではたしかに、デメテルの娘がペルセフォネと呼ばれているが、しかし、ペルセフォネの物語とエレウシスの祭祀との関係は、それほど単純ではない。またコレがペルセフォネに同定されると考えるにしても、だからといって、デスポイナも同様に固有の名前を持っていたに違いないと想定する必要はない。さらにカペイロイの場合と比較すると明らかだが、後代の作家たちは誰もデスポイナに固有名詞を割り当てようとはしなかった。

これまで示してきたことをまとめよう。まず、少なくとも次の点は確実に言えるだろう。上で言及してきた神格のアイデンティティについては、明らかに、混乱を来していた可能性が極めて高い。ヘロドトスやパウサニアスのように、混乱状況を解決しようと試みる者もいたが、ストラボンのように、この問題を未解決のままに残しておく者もいた。混乱の原因は、これらの神々のアイデンティティがそもそも知られていなかったということにある。特権的少数者にのみ知られる、秘密のアイデンティティを持っていたということではない。神々の存在は受け入れられ、儀礼も行われなければならなかったが、それ以上に何も言うべきことがなかったのである。これは、以下に述べるギリシア宗教の一側面を、極端な形で示しているように思われる。クリスティアン・スルヴィヌ＝インウッドの言葉を引用しよう。ギリシア宗教では、「人間が神々に近づくことは厳しく制限されており、人間が神々の世界を最終的に理解することはできず、人間と神々の世界との関係も不確かなのである³⁶」

名無しの神々とポリスの宗教

これまで述べてきたような状況は、我々のギリシア宗教理解にいかなる意味を持つのだろうか。これに関しては、2つの相互に関連する側面が指摘できるように思われる。

第一に、ギリシアの儀礼の中には、何ら格別の意味付けがなされないままに執り行われていたものがあつたのかもしれない。このような事態が起こりそうなのは、明らかに、

³⁵ パウサニアス『ギリシア案内記』8巻37章9節。

³⁶ Sourvinou-Inwood 2000: 20.

儀礼に大きな会衆が集うこともなく、それについてあまり人々が議論することもないような場合である。これはとりわけ秘儀にあてはまる。入信者以外が主要な儀礼を目にすることはないからだ。先に論じたように、「聖なる物語（ヒエロイ・ロゴイ）」は秘儀の儀礼について解説する、単純明快なものではない。また、秘儀の儀礼について沈黙を守るよう求められていたことからすると、それらの神話的な起源について、深め、広める機会もなかったと言えよう。そしてまた、こうした環境があったために、秘儀の祭祀は外部からの影響をあまり受けることなく、執り行われ続けたのであろう。

このことは、正反対の事例、すなわち「通常の」動物犠牲に目を向ければ説明がつく。牛の供犠は、[ギリシア人ならおなじみの]『イーリアス』や『オデュッセイア』にも描かれており、またそうした祭祀活動は、個々の都市でも、主要な全ギリシア的祭典でも、きわめて多くのギリシア人が目にしていたことだろう。そうした状況であれば、あり得べき供犠のやり方に関して、相当程度の共通理解が形成されていたに違いない。また同じ理由から、（ヘーシオドスが議論しているように）供犠の意味や起源について説明しようという者が現れることにもなったであろう。その結果、個々の儀礼を催行する際に生じる差異——供犠によっては、例えば、あまり犠牲としては用いられないような動物が奉納されていたり、参加者や、儀礼後の肉の扱いについて厳格な規則が定められていたりする——が、特別の注目を集めるようになっていた。対照的に、サモトラケの「偉大なる神々」に捧げる秘儀の場合、その儀礼を知るものは比較的少数の人間に限られる。仮に彼らが何かを知っているとしても、入信者仲間でなければ、それを話題にすることはできない。したがって、供犠の方は「決して統一されていたわけではないが」ギリシア世界共通の、一般的な方法が指向されていたとも言えそうだが、秘儀の儀礼は、それぞれが別個のものであり続けたのであろう。

ここから第2の問題が見えてくる。儀礼の起源に関する問題である。とはいえ、起源論は流行遅れであり、起源が分かれば儀礼の意味も分かるなどと言うつもりもない。また、ここで議論してきた事例の場合、さらに厄介な問題が加わる。上でも論じたように、カペイロイやサモトラケの「偉大なる神々」の場合のように、考古学の成果を利用して祭祀開始時期をある程度推定できるものもあるが、しかしその他の祭祀については、ほとんど何も分かっていない。例えば、アンダニアの「偉大なる神々」については、聖域の位置も確定されていなければ、祭祀創設年代についても、伝統的に、おそらく前1世

紀のことだろうとされてきたに過ぎない。こうした注意点を考慮に入れ、慎重に論を進めるべきだろう。

ここでは、高名なギリシア宗教史家が儀礼の起源を探る際に用いた、2つのアプローチから考えていきたい。まず初めはヴァルター・ブルケルト Walter Burkert である。些か単純化するが、彼の考えによれば、神話にせよ、儀礼にせよ、その起源は歴史以前に遡り、それらが根本的に重要な行動（アクション）、あるいは出来事を、人間のライフサイクルに結びつけているのだという³⁷。この見解に従えば、儀礼の基本的要素は通時的にみて変化することではなく、しかし神話同様、いつでもその時々が必要に応じて調整が可能ということになる。もう一つはクリスティアン・スルヴィヌ＝インウッドのアプローチである。彼女は、エレウシスの秘儀について、次のようにまとめている。

エレウシスの祭祀は初めから<彼女は前8ないし前7世紀と理解している>、農耕に関連する重要な「ポリス中央の」祭祀である。...それは、儀礼の上でも、神話の上でも、中央との繋がりを持ち、ポリスの領域を象徴的に明示しており、周辺領域を統合するための一助となっている。...この祭祀の性格は前6世紀初めに変化した。終末論的要素が取り入れられ、祭祀は秘儀的なものに姿を変えた...。³⁸

このように神話と儀礼はともに、同時代の関心を反映する。スルヴィヌ＝インウッドは、古代ギリシアの死について論ずる中でこうした発言をしているわけだが、前6世紀に古代ギリシアの広範な地域で死に対する態度が変化したとも主張しており、同じ時期に秘儀が終末論的な様相を帯びるようになったという仮説は、この説に符合しているのである。

これらのアプローチは一見すると正反対にも見えるが、結局のところ、同じことになる。ブルケルトの言うように、儀礼が太古の昔に始まったものだと、それは実際にはどのようにして儀礼として確立したのだろうか。おそらくその様子は、スルヴィヌ＝インウッドが根本的に重要なものと考えている、同時代の関心によって規定されていたのだろう。すなわち、儀礼というものは、それが執り行われる世界を反映しているので

³⁷ 例えば Burkert 1979.

³⁸ Sourvinou-Inwood 2003: 26.

ある。しかし、神話によって個々の人間の生き方や共同体生活と関連づけることができない、アイデンティティを定めることのできない神格の場合、こうしたアプローチはうまくいくのだろうか。

ここでは、この問いに対する解答をどこに求めたらよいのか、1つの考えを提示することで論を閉じることとしたい。すでに上で、サモトラケの「偉大なる神々」に対する祭祀、エーゲ海東北部のカベイロイ祭祀に関しては、アナトリアで「ギリシア以前」に行われていた可能性を指摘した。そうだとすると、ギリシア人は、ギリシア世界の外側で行われていた儀礼を受容して、祭祀を行っていたことになるだろう。用いられていた言葉もそのまま利用していたため、それらはやがて理解されなくなってしまった。おそらくペロポネソス半島では、類似の儀礼が青銅器時代から絶えることなく行われてきたのだろう。ギリシアの他の地域でもそうだったのかもしれない。ペロポネソスでは青銅器時代からギリシア語が話されていたため、こちらでは言葉の問題は生じなかつただろうが、青銅器時代の社会でなんらかの機能をもっていた儀礼は、初期鉄器時代以降、世界が変化する中で、その意味を失っていったのかもしれない。それにもかかわらず、儀礼について秘密を守ることになっていたため、新時代になっても、儀礼そのものは保持されていた可能性が考えられるだろう。

本報告では、古代ギリシア宗教について、取り組むべき興味深い問題がいくつかあることを示すことができただろう。それらに対する解答を持ち合わせているというつもりはないが、この問題に取り組むにあたっては、まず私たち自身がどこまで理解し、また同時に、ギリシア人自身がどこまでの知識を持っていたのか、その限界を明らかにすることから、議論を始める必要がある。

【参考文献】

- Beekes, R.S.P. (2004) 'The origin of the Kabeiroi', *Mnemosyne* 57: 465-477.
- Beschi, Luigi (2000), 'Lo scavo del Cabirio di Chloi', in *Un ponte tra l'Italia e la Grecia: Scritti in onore di A. Di Vita*, Ragusa, Padova, 75-84.
- , Monaco, M.C., Zarkadas, A. & Gorini, G. (2004), 'Il Telesterio ellenistico del Cabirio di Lemno', *ASAA* 82, 225-341.
- Bowden, H. (2007), 'Cults of Demeter Eleusinia and the transmission of religious ideas',

Mediterranean Historical Review 22: 71-83.

————— (2010), *Mystery Cults in the Ancient World*, London.

Bruneau, P. (1970), *Recherches sur les cultes de Délos à l'époque hellénistique et à l'époque impériale*, Paris.

Burkert, W. (1979), *Structure and History in Greek Mythology and Ritual*, Berkeley.

(邦訳：ヴァルター・ブルケルト (1985) 『ギリシアの神話と儀礼』(橋本隆夫訳) リプロボート)

————— (1987), *Ancient Mystery Cults*, Berkeley.

Buxton, R. (ed.) (2000), *Oxford Readings in Greek Religion*, Oxford.

Clinton, K. (1993), 'The sanctuary of Demeter and Kore at Eleusis', in Marinatos & Hägg (1993: 110-124).

Cole, S.G. (1984), *Theoi Megaloi: the cult of the Great Gods at Samothrace*, Leiden.

Cooper, F.A. & Morris, S. (1990), 'Dining in round buildings', in Murray (1990: 66-85).

Cosmopoulos, M.B. (ed.) (2003), *Greek mysteries: the archaeology and ritual of ancient Greek secret cults*, London.

Heyder, W. & Mallwitz, A. (1978), *Die Bauten im Kabirenheiligtum bei Theben (Deutsches Archäol. Inst. Das kabirenheiligtum bei Theben 2)*, Berlin.

Jost, M. (1994), 'Nouveau regard sur les Grandes Déesses de Mégalopolis: influences, emprunts, syncrétismes religieux', *Kernos* 7: 119-29.

Marinatos, N. & Hägg, R. (eds.) (1993), *Greek sanctuaries: new approaches*, London.

Murray, O. (ed.) (1990), *Symptotika: a symposium on the symposium*, Oxford.

Schachter, A. (2003), 'Evolution of a mystery cult: the Theban Kabirot', in Cosmopoulos 2003, 112-42.

Seaford, R. (1981), 'Dionysiac drama and Dionysiac mysteries', *Classical Quarterly* 31: 252-75.

Sourvinou Inwood, C. (2000) 'What is polis religion?' in Buxton (2000: 13-37).

————— (2003), 'Festivals and Mysteries: aspects of the Eleusinian cult', in Cosmopoulos (2003: 25-49).

Vermaseren, M.J. (1977), *Cybele and Attis: the myth and the cult*, London: Thames and Hudson.

[邦訳：M. J.フェルマースレン (1986) 『キュベレとアッティス：その神話と祭儀』(小川英雄訳)]

新地書房]

[ギリシア・ローマ世界における秘儀について、より詳細に知りたい方は、Bowden 2010 巻末の参考文献を参照されたい。さらにアンダニアの秘儀については昨年、詳細な註釈書が刊行された。

Gawlinski, L. (2011), *The Sacred Law of Andania: A New Text with Commentary*, Berlin/Boston.]